

東京藝術大学 奏楽堂 モーニング・コンサート Morning Concert

第 5 回

2026年 6 月25日(木)

指揮：梅田俊明

藝大フィルハーモニア管弦楽団

鎌倉 航（作曲）

鎌倉 航：『彼らは.....』

関谷鳳翔（サクソフォン）

吉松 隆：サイバーバード協奏曲

ピアノ = 半田琉璃

パーカッション = 藤本隆文

19：45開演 東京藝術大学音楽学部第6ホール

主催：東京藝術大学音楽学部・東京藝術大学演奏芸術センター

◆鎌倉 航（4年：作曲）KAMAKURA Ko

鎌倉 航：『彼らは.....』（演奏時間約14分）

2004年生まれ、埼玉県出身。

小学生で合唱とピアノを始め、高校1年で作曲を始める。現在は東京藝術大学音楽学部作曲科に在籍中。作曲を勉強する傍ら、主に2団体で合唱を続ける。

2年次室内楽作品が、藝大生による木曜コンサート〈作曲〉の出品作品に選出、2025年11月に初演。

これまでに作曲を藤森さな、山中麻鈴、安良岡章夫、金子仁美、望月京の各氏に師事。

好きな音楽は、ブラームス、アニメ「ワンピース」のサウンドトラック。ほかにFRUITS ZIPPERとM!LKを愛聴。趣味は旅行、ドライブ。季節のイベントを存分に楽しむESFP。



僕の中学からの友人の作品である。

荘重な色使いの中でひととき目を引く船。乗っているのは人間だろうか。

僕はこの、一見静謐だが何か強く訴えるようなエネルギーを内包している絵を、曲にしてみたいと思った。

作曲にあたり、この絵が表現しているものをより鮮明に理解したいと思い、彼にいくつか質問した。

答えはこうだ。

「いろいろな解釈があると思う。鑑賞者の感じたことが、そのままこの絵の意味になる。」

彼の解釈をヒントに教えてもらいながら、僕は自分なりにこの絵からストーリーを読んでみた。

今、この絵が描かれた瞬間、それぞれ違う姿をした人間のような生き物は、同じ方向を向いて船に乗っている。進む先には光がある。

来た道は闇に包まれつつある。

では光のある場所を目指しているのだろうか。

船の上にかけて描かれたとげとげしているものは、ジャングルの枝だろうか。何にせよ、頭上が開けていない場所にいるのだろう。

では今は、身を隠しているのか。

今がわかると、未来と過去に思いを馳せることができる。

船に乗っている「彼ら」はどこを目指しているのか、なぜそこを目指したくなったのか。この絵の今に至るまでに何が起ったのか。

そういった、不確定だが考察しうる時間の流れを、絵は内包している。

一方、曲は時間芸術である。絵を曲にするとき、確実に時間軸を付与しなければならない。絵を、単に音という道具を用いて描写するのではなく、絵から読み取る前後のストーリーを僕なりに解釈・補完し、曲にしようと試みた。

曲は大きく、寄港、弾圧、再出発、脅威の場面に分けられる。

特に弾圧と脅威の場面において、このストーリーをより鮮明に感じられる工夫を施した。



金井大次朗「彼らは.....」
2025 / 910x1167mm / Oil on canvas

僕が絵に対して感じた臨場感を、オーケストラの立体空間に置き換えて表現するという試みである。

聴衆にとってオーケストラから奏でられる音が、テレビのような一枚の画面を見てスピーカーからひとかたまりの音を聞く、第三者的な音響になるのを避け、ステージという3次元フィールドで、まるで演劇をしているかのような動的空間の演出、ひいては聴衆が舞台上の出来事を当事者的に感じられる音響を求めた。

例えば、再出発から脅威への移り変わりの場面、光に憧れて舞台向かって左側に音響が集まっていく。すると右の端から不穏な影が現れ、瞬間に舞台に波及する。

船を狙う鯨だ。鯨は姿を表し大きく舞台上を暴れると、何事もなかったかのようにまた深海に戻っていく。

この曲最大のアトラクション、見逃さないでほしい。

（鎌倉 記）

参考資料：鎌倉 航『彼らは.....』



金井大次郎「彼らは.....」
2025 / 910x1167mm / Oil on canvas

◆関谷鳳翔（4年：サクソフォン）SEKIYA Hohsho 吉松 隆：サイバーバード協奏曲（演奏時間約28分）

2004年生まれ、東京都中央区出身。12歳よりサクソフォンを始める。東京都立晴海総合高等学校を経て、東京藝術大学に在学中。学内にて安宅賞を受賞。

第31回日本クラシック音楽コンクール第2位や、第7回Kサクソフォンコンクール、第41回全日本ジュニアクラシック音楽コンクール木管楽器部門、第25回ジュニア・サクソフォンコンクールにて第1位受賞。第4回Josip Nochtsa国際サクソフォンコンクール（クロアチア）セミファイナリスト。第40回日本管打楽器コンクール第2位。

JAZZ in 藝大2024・2025やラ・フォル・ジュルネTOKYOなどに出演するなど、各地で演奏活動を行っている。

2025年度瀬木芸術財団短期海外研修奨学生、2026年度宗次エンジェル基金／日本演奏連盟新進演奏家国内奨学金奨学生。

これまでにサクソフォンを清水容子、西村魁、田中奏一郎、齊藤健太、林田祐和、住谷美帆、大石将紀、須川展也、本堂誠、榮村正吾の各氏に、室内楽を松井宏幸氏、ソルフェージュを羽石道代氏に師事。



タイトルの「サイバーバード」は、電腦空間に存在する架空の鳥を意味します。本作では、サクソフォンがオーケストラという「翼」を得て、クラシック、ジャズ、ロック、エスニックといった多様な音楽世界を横断しながら空を駆ける姿が描かれています。作品は急・緩・急の三楽章構成で、それぞれ《彩の鳥》《悲の鳥》《風の鳥》と題されています。

第1楽章《彩の鳥》は、色彩の異なる層をすり抜けるように飛ぶ、錯綜したアレグロ。

第2楽章《悲の鳥》は、悲しみの中で夢を紡ぐように歌われるアンダンテ。

第3楽章《風の鳥》は、風に乗って一直線に駆け抜けるプレストとして描かれています。

また本作の背景には、作曲当時の吉松隆氏自身の経験が深く関わっているとされています。吉松氏は病床にあった妹の看病を続けながら本作を書き進めており、妹は生前、「空が見たい」「今度生まれてくる時は鳥がいい」と語っていたそうです。その言葉は、第2楽章《悲の鳥》の着想の一つになったと伝えられています。

吉松氏は本作について、「サクソフォンはオーケストラという翼を得て、飛び、歌い、泣き、吠え、疾走する」と述べています。また自身のホームページでは、「『サイバーバード』とは、生命維持装置と人工呼吸器に囲まれて最後まで自由な空を飛翔する鳥を夢見た、そんな妹と私との見果てぬ夢でもある。だからこそ、終楽章では涙を見せずに全力で疾走するのだ。」と記しています。

私は第2楽章《悲の鳥》で絶え間なく鳴り続ける“A”の音に、まるで心電図のような生命の鼓動を感じました。終盤ではその“A”が“G”へと変化し、ゲネラル・パウゼやフェルマータを経ながら、最後には完全に停止します。その瞬間には、人間の尊さや、生の儚さのようなものが静かに暗示されているように感じ、強く心を動かされました。

終楽章《風の鳥》では、一瞬立ち止まり苦しみや悲しみを見せながらも、その後は狂おしいほどの勢いで空へ舞い上がり飛翔していきます。吉松氏は終盤について、「ここはどうやって書いたか全く記憶がない。オーケストラはB♭maj7、E♭maj7の2つのコードを繰り返すだけで、サクソフォンとパーカッションには～の波線と《Ad Lib!》の文字が書かれてるだけなのにそこが1番熱い」。そこに『音楽』が宿っているのは、妹の《魂》のせいとしか言いようがない。」と語っています。

今回、ピアニストの同期である半田琉璃氏、本学教授である藤本隆文先生、藝大フィルハーモニア管弦楽団の皆様、そして指揮の梅田俊明先生とご一緒させていただけることに、心より感謝申し上げます。本作品の持つ多彩な表情やエネルギーを、皆様とともに大切に音楽として形にしていければ幸いです。

最後になりましたが、本日はモーニング・コンサートにお越しくださり、誠にありがとうございます。日頃よりご指導を賜っております先生方、この演奏会のためにご尽力くださったスタッフの皆様、そして本日まで来場くださった皆様に、心より御礼申し上げます。

（関谷 記）



©K.Miura

1984年桐朋学園大学音楽学部を卒業。1986年同研究科を修了。指揮を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。1983、1984年には来日中のジャン・フルネ氏にも学んだ。1986年よりウィーン国立音楽大学指揮科に留学、オトマール・スイトナー氏に師事し研鑽を積んだ。帰国後、日本センチュリー、仙台フィルハーモニー、神奈川フィルハーモニーの指揮者を歴任。NHK響、読売日響、東京都響、東響、日本フィル、東フィル、新日本フィルを始め、国内主要オーケストラと長年にわたり共演を重ねている。2000年4月より仙台フィルハーモニーの常任指揮者に就任。オーケストラの発展に情熱を注ぎ込み2006年3月までその任を務めた。2001年第1回、2004年第2回仙台国際コンクールでは全ての協奏曲を指揮し、出場者、聴衆、国内外の審査員から絶賛を博した。1996年1月には南西ドイツ・フィルハーモニーとスロヴァキア・フィルハーモニーの定期演奏会に出演、いずれも好評を博した。的確な棒さばきと音楽に対する誠実な姿勢でオーケストラからの信頼も厚い。東京藝術大学非常勤講師として後進の指導にもあたっている。

管弦楽：藝大フィルハーモニア管弦楽団 The Geidai Philharmonia Orchestra, Tokyo

藝大フィルハーモニア管弦楽団（2016年秋、「藝大フィルハーモニア」から改称）は東京藝術大学に所属するプロフェッショナル・オーケストラで、定期演奏会のほか、声楽科との「合唱定期」、オペラ専攻との「オペラ定期」、音楽学部の「新卒業生紹介演奏会」、年末恒例の「チャリティーコンサート メサイア」（朝日新聞厚生文化事業団・朝日新聞社主催）、「台東第九公演」などを行なっている。教育面では、器楽科・声楽科学生との協奏曲等の共演および作曲科学生の作品披露を行う「モーニング・コンサート」（年13回）や、指揮科学生との演奏会・試験・演習、東京藝大ジュニア・アカデミーの生徒との協奏曲の共演などを通して、学生の演奏経験の拡充に資している。学外での活動も積極的に行なっており、近年では、新国立劇場での「世界若手オペラ歌手ガラコンサート」や現代舞踊名作劇場（現代舞踊協会）の出演をはじめ、長崎県五島市、新潟県長岡市、新潟県魚沼市、秋田県秋田市、茨城県取手市でも公演を行い、いずれも好評を博した。海外では、2017年6月のチリでの4公演（日本・チリ修好120周年記念）に続き、2023年12月には、世界三大劇場の一つであるアルゼンチンのコロソ劇場（Teatro Colón）からの招聘による公演で聴衆を魅了し、15分以上に及ぶスタンディングオベーションを受けた。また2024年12月には、ヴァイオリンの巨匠ジェラルド・プーレ氏と共に、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲のCD録音を実施した。（公社）日本オーケストラ連盟準会員。

ソロ・コンサートマスター
植村 太郎コンサートマスター
澤 亜樹 ◎
對馬 佳祐

第1ヴァイオリン

荒井 友美
生田 絵美
加藤 えりな
金子 芳子
河野由里恵
佐原 敦子
菅谷 早葉
西田 史朗
前田 奈緒
増尾 朗子
吉澤 知花 *
矢黒 花枝 ◆

第2ヴァイオリン

村津 瑠紀 ○
山本 有紗 ○
清岡 優子
小暮 莉加
小杉 結
野田 良子
福井 彩花
福崎 雄也
マヤ・フレーザー
宮本 有里
柏木 かなえ *
藤林 麻子 *
谷田 翔平 ◆

ヴィオラ

安藤 裕子 ○
吉田 篤 ○
阿部 哲
梶岡 弥生
中川玲美子
麻柄明日香
森 朱理
青木 史子 *
春木 英恵 *
田口 桜子 ◆

チェロ

羽川 真介 ○
山澤 慧 ○
寺井 創
豊田 庄吾
夏秋 裕一
松本 卓以
羽川 恵子 *

コントラバス

赤池 光治 ○
長坂 美玖 ○
倉持 敦
小室 昌広
永田 由貴 *
水野 翔子 *
贄田 美羽 ◆

フルート

細川 愛梨
山本 葵
内山 貴博 *

オーボエ

戸田 智子
山田 涼子
川本 伶美 ◆

クラリネット

濱崎 由紀
春田 傑
阿部 寛己 *
齋藤 雄介 *
栗山 かなえ ◆

ファゴット

坪井 祐樹
宮崎 寿理
春山 竜也 *
日谷 唯斗 ◆

サクソフォン

吉田谷 隆介 ◆

ホルン

谷 ひな子 ○
岡村 陽
堂山 敦史
梁川 笑里
近藤 寿奈 ◆

トランペット

平山あかり
星野 朱音
鶴田 麻記 *
金子 美保 *
蓬田奈津美 *

トロンボーン

東川 暁洋
久保田和弥
山下 純平 *

チューバ

芝 宏輔 *

ハープ

ユンスミン ◆

ティンパニ&パーカッション

井手上 達
ニツ木千由紀
目等 貴士 *
村瀬 芽生 ◆
村田 倫樹 ◆

ピアノ

鷹羽 咲 ◆

楽団長

福中 冬子

事務局長

酒井 敦

事務局次長

小宮山雄太（チーフ・ステージマネージャー）
小久保綾子（チーフ・ライブラリアン）

インスペクター

葛谷 拓摩

ステージマネージャー

森本 直通

アシスタント・ステージマネージャー

徳永 芽久

ステージスタッフ

神山 巧弥

ライブラリストスタッフ

安田 沙織
廣田 碧
小林 世佳

演奏活動強化担当

足立 優司

庶務

野村 智行
松井 勝幸

発行：2026年6月25日(木) 東京藝術大学

編集：東京藝術大学音楽学部

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

お問い合わせ：東京藝術大学演奏芸術センター

TEL 050-5525-2300

※無断転載・複写・引用などを禁じます

◎：コンサートマスター
（本公演）

○：首席奏者

*：賛助出演

◆：本学学生